



滋賀医科大学附属図書館報

No.41

目 次

1997年8月

図書館、Library、Bibliothek	副学長 挾間 章忠	2
シリーズ「本との出会い」(6)		
『シッダールタ』再考	英語助教授 相浦 玲子	4
「附属図書館の利用についてのアンケート」集計結果		5
「マルチメディアセンター」の設立によせて		7
行事報告	図書課情報サービス係	7
新着ビデオの紹介	図書課情報管理係	9
附属図書館統計		10
附属図書館の活動		11
本学関係者寄贈図書		12

図書館、Library、Bibliothek

副学長 挾 間 章 忠

これまで50年以上の間、いろんな文庫、図書館を利用して来たが、ふっとそれら過去の図書館との出会いをなつかしく思いだした。本との最初の出会いは、まだ幼かった頃、私が育った家の書庫だった。そこにはいろんな種類の本が並んでいた。父は本屋が持ってくる全集を片っ端から買っていた形跡がある。と言うのは、その種類があまりにも雑多で、統一が取れていなかったからだ。父がそれらの本を読んでいたかどうかは定かでない。私はやんちゃで、どちらかと言えば外で暴れ回るほうが好きな子供であったが、案外、この部屋に一人で籠り切って熱心に読書していた記憶もある。講談全集の荒唐無稽な話にうつつを抜かしていた一方で、内容が理解できるはずのない漱石全集を小学校の頃からすでに読んでいたのを覚えている。すべての漢字にルビが振られていたのがその理由の一つと考えられる。そのうちに鷗外全集も読むようになった。難しいところは抜かして読んでいたに違いないが、その後も繰り返し読んで、私の人格形成にかなりの影響を与えることになった。「三っ児の魂百まで」と言うが、どのような本を家に置いておくかということは子供の人格形成に重要な問題なのかも知れない。

また小学校の頃、市立図書館を恐る恐る尋ねたことがある。今まで見たこともないような沢山の本が書架に並んでいるのにびっくりし、胸を踊らせた。ただ、利用者は書庫内に入ることができず、まずカードを検索して係の人に希望の本を取り出してもらうという複雑なシステムであったため、自分自身で本の内容を予め知ることができず、どのような本を読もうという目的のはっきりしていなかった子供の私にはあまり利用価値はなく、また戦争もたけなわとなり、あまり行かなくなった。

戦争が終わり、アメリカ文化センターが設立された。ここにも図書館があり、あまり多くはなかったが、新刊書がずらりと書架に並び、出入り自由であり、簡単な手続きで本の借用ができるのを見て新鮮さを感じた。中学の後半から高校時代に、このセンターにはよく通った。当時は生きた英語を学ぶ手段は直接外人に接する他はなかった。センターで催される米語会話の授業には、美人の教師がいたおかげで熱心に参加した。そこで、アメリカ哲学にプラグマティズムなるものがあることを知り、古くさい利用されない日本の図書館と比べ、アメリカの図書館にその言葉を当て嵌めてみたりしたものだ。

私の大学時代は戦争直後で、日本全体がまだ貧しい時代だった。本は少なく、紙質の悪い岩波文庫がやっと毎月数冊復刊されていたに過ぎず、それを片っ端から買ってむさぼり読んだ。選択の余地はなかった。図書館にも本がなく、だだっ広い寒々とした館内にわずかの本が並んでいるに過ぎなかった。どのような経緯だったか、江戸時代に流行したコレラに興味を持ち、自分で古文書を読みたいと思い、大学図書館を尋ねた。ここには医学史の大家である富士川游博士が寄贈した文庫があり、一般

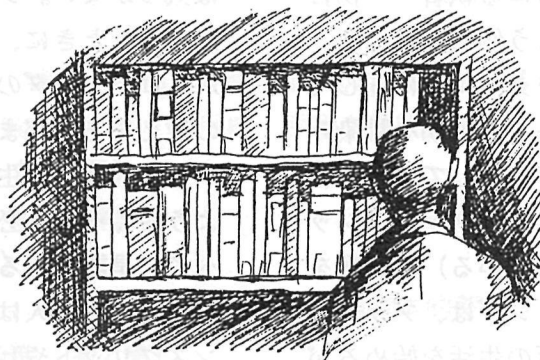
蔵書から離れた場所にあまり整理もされず積み上げられていた。それら古文書の量の多さと質はすばらしいもので、思わぬところに宝の山が転がっているのを見て驚いた。

大学を卒業し、入局した京都大学の病理学教室にはすばらしい蔵書があった。昔、火事で建物は全壊したが、当時の教授は教室の再建の予算を見て0を一つ付け足した。ところがそっくりそのまま予算がついたという話を聞いたことがある。病理の有名な雑誌は初巻から揃っていた。ただ、戦中、戦後の新しい雑誌は欠けたままだった。単行本も、古いドイツ語の有名な医学書はほとんど揃っていた。これも新しい本はなく、書庫はほこりを被って誰も利用しようとしなかった。しかし、詳細に観察すると、ここにも宝の山があることがわかった。時を忘れて書庫で本に見入ることも屢々だった。漱石の「三四郎」のなかに、主人公が大学の図書館のどの本を取ってみても、かならず読まれた形跡を発見し、驚くシーンがある。同様のことを私も体験した。本にはアンダーラインが引かれ、書き込みがなされ、感激した箇所にはブラボーとさえ書かれており、先輩の息吹きに直接触れる思いをした。古い解剖記録に、初代教授の藤波鑑先生が弟子の記録にびっしりと朱で訂正されているのを見て感激した。また、生体染色法で網内系なるものを確立された、清野先生が書かれた大部のドイツ語の単行本を発見し、驚嘆した。ある本棚に巻物があるのを見つけ、広げてみると学会に参加し、皆で楽しんだ様子が、筆と墨で見事な絵物語で書かれていた。このような経験から、ほこりにまみれた教室の書庫が過去の有名な偉い先生方をごく身近な存在にしてくれた。

その後、ドイツのミュンヘンにあるマックス・プランク精神医学研究所に留学したが、この研究所には小さいながら立派な図書館があった。その主任は、とても優雅な品のよい中年のレディーだった。私が図書館を尋ねていくと、かならず近寄ってきて、「何を探しているんですか？お手伝いしましょうか？」と尋ねてくれた。20年後に短期間この研究所に滞在し、図書館を尋ねたとき、「Dr. Hazama、お茶を入れましょうか？」と名前を憶えていたのには感激した。私が翻訳した、私の先生と同僚の2冊の著書の翻訳書もここに収められているはずだ。

残るはわが大学の図書館であるが、ここだけしか知らない若い諸君は、ここの設備、サービスが他と較べて優れたものであることがわからないだろう。とても機能的にできている。いずれマルチメディア・センターと一体となり、近代的な情報センターとなるにちがいない。できるだけ多くの人が図書館を十分に活用し、各自の楽しい、なつかしい思い出をつくって欲しいものだ。

(はざま ふみただ)



シリーズ「本との出会い」(6)

『シッダールタ』再考

英語

助教授 相浦 玲子

今から十年ほど前にもヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について書いたことがあるが、その後もこの本は、心の糧でありつづけている。文学を専門とする私にとって本を読むというと、身構えて、分析的な態度になりがちであるが、この本は私を素直な気持ちにしてくれる。

私は英国留学中に各国からやってきた若い研究者に出会い、それまで深く考えていなかった東洋と西洋という概念をこのとき身近に感じる事ができた。文化を異にする国に行き初めてアジアに目が開かれたといってもいいかもしれない。異国での勉強がスランプに陥っていたとき、やはり文学を研究しているインド人の友人が英訳版のヘッセの『シッダールタ』を推薦してくれた。専門以外の分野の本を読んでいる暇などなかったはずなのに、この本は、心に染みて私の中で大きな力になった。

「シッダールタ」は、本来ブッダ(仏陀)の名前であるが、西洋の、しかもクリスチアンの作家、ヘルマン・ヘッセによって書かれた作品である。ヘッセは彼の親や祖父母がキリスト教の宣教師として長くインドに滞在していたことはあるが、彼自身は意外にもインドで暮らしたことがない。そのヘッセが人間の本性を見据え、生と死、この世におけるあらゆる執着——物質的あるいは精神的——の向こう側に至る道を、彼の作り上げた主人公、シッダールタに託して描く。ゴヴィンダはシッダールタの幼な馴染みで、共にバラモンの修道院で修行していたが、あるとき二人はブッダ(ここではブッダはシッダールタと別人として扱われている)の説教を聞いて深く感動する。ゴヴィンダは、ブッダに従って出家して、そこで修行の生活を始めるが、シッダールタは、それでは心が満たされず、次から次へと気がむくままの生活を送る。カマラ

という女性に強く心をひかれたり、カーマスワミという商人の元で、ひたすら利潤の追求にいそしみ、欲にひたった生活をして、物質的に満たされるが、心の充足感は得られない。人生の多くの出来事に遭遇した後、すべての希望に破れ、倦み、疲れたときに、川で渡し守のヴァスデヴァに出会う。彼は一見、ただの渡し守の老人であるが、シッダールタは毎日、川を眺めてこの人のもとで暮らすうちに、この人の中にブッダの持っていたあの晴れやかで、平和な表情を見てとる。彼自身も、目の前を流れる川に耳をすまして聴くようになる。川はすべてを含みながら、しかし、過去(への執着)でも未来(への欲望)でもなく時間を超越した現在を秘めていることを彼は次第に悟る。

シッダールタとゴヴィンダは、老年になってから川のほとりで再会する。そのときゴヴィンダは仏教集団の高僧になっているが、シッダールタは一介の渡し守にすぎない。彼は最初は、多くの幸せそうな家族を対岸に渡すとき、愛し、愛される者を持たないわが身を嘆くが、そのうちに深い同情を持って人々を見られるようになった。彼は愛する者も、財産もすべて失い、バラモンとしての誇りからも離れていたが、それによってはからずも、この世のすべての束縛から解放され、主張する自我にも悩まされなくなっていた。求道者ゴヴィンダは、これこそが悟りへの道だと気づき、どうすればそのように成れるのかをシッダールタにたずねるが、それぞれの人格によって異なるはずの悟りへの道を他人に訊ねる行為そのものが、ゴヴィンダを真の悟りから遠ざけているにほかならないことには気づかない。シッダールタはかつてブッダに出会ったときに、その姿に大きな感銘を受けるが、ゴヴィンダのように、そのあとに従い、その教えをあるがままに受け入れることはできなかった。彼は人生で大きな廻り道をしたあと、ようやくそれも必要な過程であったと認め、すべてを是認できるようになる。

インドの友人は、この作品の中に出てくるサンスクリットやヒンディー語の言葉の説明をして、商人の名の意味は、カーマ=「欲望」 スワミ=「主人」であること、そしてヴァスデヴァと

は、「すべてのものが宿り、すべてのものに宿る者」という意味であることなど、如何にヘッセがインドや仏教に対する造詣が深いかが窺い知れるということを教えてくれた。これ程までにインドの魂を描き得た作品は少なくとも今世紀にはない、と私の尊敬する友人は言い切った。ただ、ヘッセが思いもよらないところで冒した異文化理解の上での小さな過ちも指摘してくれた。それは、おおむね暑いことの多いインドでは、人をもてなすときに、「温かい」もてなしというよりは「冷たい、涼しい」もてなしをするはずだというものであった。私たちは(少なくとも自戒の念をこめて言うのだが)、たしかに異文化をみるとき、自分の持つ価値観や文化の基準で物事を考えがちである。そしてともすれば自己の基準を他に押しつけたくなるものだ。この

友人の指摘は、些細なことながら、私に異文化を理解するということについて真剣に考える機会を与えてくれた。

寒いヨーロッパの気候の中であって、太陽のさんさんと照るやしの木の下で瞑想にふけるシッダールタを想像することはむずかしかったが、文化的背景を教えられることによって、ずいぶん理解を助けられた。そして卑小なことに行き詰まって悩んでいる小さな存在の私の内面に、多くのことを語りかけてくれた。今でも『シッダールタ』は、この本を読むたびに浮かびあがってくるなつかしい思い出と共に、人生に介入するさまざまな葛藤を超えて、真摯な生き方の一つを私に示してくれるのである。

(あいうら れいこ)

「附属図書館の利用についてのアンケート」集計結果

今年、1月と3月の2度に分けて実施しました「附属図書館の利用についてのアンケート」について、多くの方からの回答をいただきありがとうございました。

回答率は、概ね学部学生が5割弱、大学院学生が4割弱、教官が7割弱という結果でした。また、様々なご意見もいただき、集計結果同様参考となることが多く今後の図書館サービスの向上に役立てたいと思っております。

対象者

- 1)学部学生 (以後、「学生」)
- 2)教官、医員、研修医、大学院学生(以後、「教官等」)

回答総数 614名
 学生 373名
 教官等 241名 (大学院学生63名を含む)

1. 図書館の利用頻度について

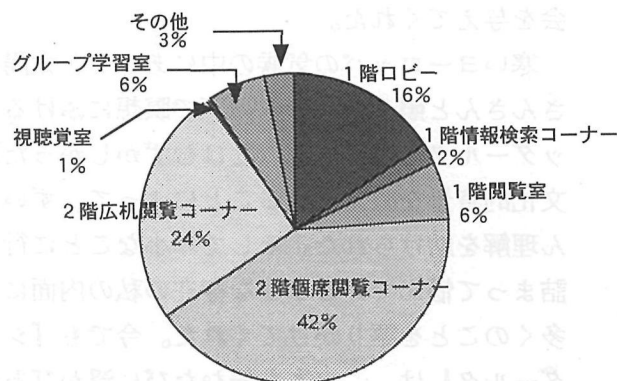
(単位=人)

	週に1日以上利用	月に10日以上利用	ほぼ毎日利用	小計	その他	総計
学 生	160	38	5	203	170	373
教官等	148	35	11	194	47	241

- 「その他」では、学生は試験(テスト)の前・中の利用がほとんど。
- 少なくとも、週に1日以上利用している人は、学生で203名(54%)、教官等で194名(80%)となり、教官等ではコンスタントな利用状況がうかがえる。

2. 図書館でよく利用する場所について

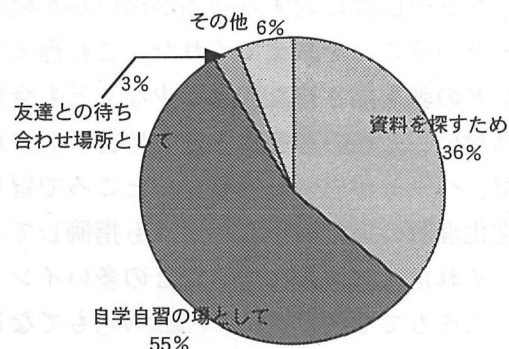
(複数回答：594名) 学生のみ



- 2階の個室閲覧コーナーと広机閲覧コーナーの利用が7割近くを占める。

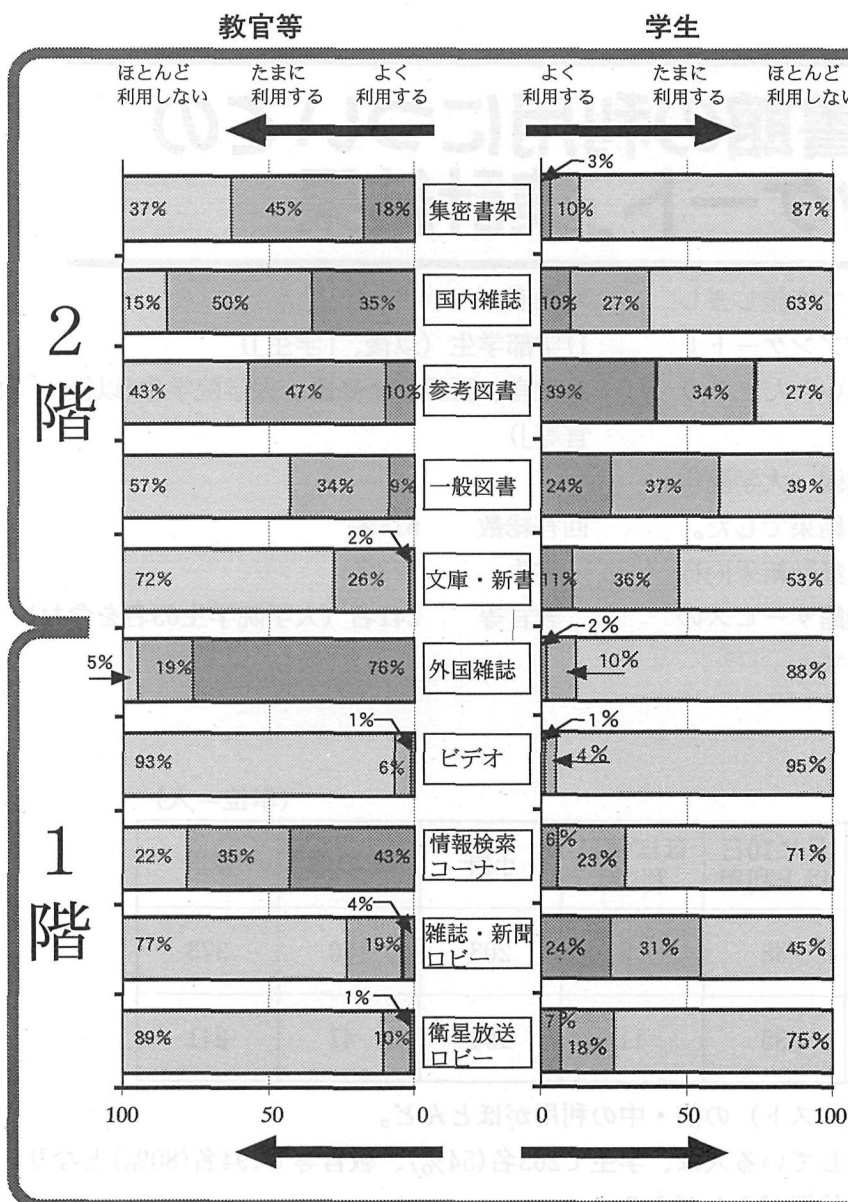
3. 図書館の利用目的について

(複数回答：565名) 学生のみ



- 前項の結果からも、自学自習の場としての利用が定着している。
- 「その他」では、コピーのためが多かった。

4. 図書館でよく利用する資料や設備



- 学生と教官等で利用する資料の違いがはっきりと出ている。
- 学生は参考図書、一般図書、文庫・新書など、図書資料の利用が中心であり、自学自習を目的とした図書館利用と思われる。
- 教官等は外国雑誌と国内雑誌の利用が高く、集密書架も雑誌のバックナンバーを利用しているものと推察される。また、情報検索コーナーの利用も高いことから、学術論文からの情報収集を目的とした研究センターの図書館利用がうかがえる。

「マルチメディアセンター」の設立によせて

今年4月に「マルチメディアセンター」が設立されました。同センターは他大学の「情報処理センター」にあたるものですが、本学では単なるコンピュータセンターではなく、電子媒体から紙媒体まで、情報を広く教育・研究に活用し、医学及び看護学等の発展に資することを目的として「マルチメディアセンター」と名付けられました。

情報化社会への急速な発展に伴い、大学図書館界においては、電子図書館的機能の充実・強化が叫ばれており、とりわけ本学のような医学系図書館にあつては、ネットワークを介しての情報収集・発信は生命線でもあります。

当面、「マルチメディアセンター」は情報処理センター機能に限定して運用されますが、今後は、本学における教育・研究支援の高度化のために、附属図書館とマルチメディアセンターとの連携について、具体的方策がとりまとめられる予定となっております。



◆ 行 事 報 告 ◆

平成9年度

新入生オリエンテーション (附属図書館案内)

本年もオリエンテーションの一環として、附属図書館の「利用案内」を、次のように実施しました。

- ・対 象 新入生 170名
(医学科 100名、看護学科 70名)
- ・日 時 4月10日(水) 14:20-16:00
- ・場 所 臨床講義室3、附属図書館
- ・内 容

図書課長の挨拶と図書館についての全体説明のあと、7班に分けて(各班20-25分程度)図書館へ移動、入館ゲート、雑誌や図書の場所、OPAC、貸出・返却等、図書館の利用方法について案内しました。(情報サービス係)

平成9年度

医学総合研究特論(大学院特別講義) 文献検索に関するオリエンテーション

本年度より大学院学生を対象とした「文献検索オリエンテーション」を開始しました。

- ・対 象 大学院医学研究科1年生39名
(内15名出席)
- ・日 時 5月12日(月) 14:00-17:00
- ・場 所 大学院講義室、附属図書館、多目的教室(仮称)
- ・内 容

文献検索から文献入手、雑誌への投稿までの概要を説明。MEDLINE CD-ROM検索、学内LAN経由のMEDLINE検索、インターネットを介したさまざまな文献検索の紹介と実習を行いました。(情報サービス係)

平成9年度 新規採用医員(研修医) 文献検索オリエンテーション



本年より履修指導の一環として、附属図書館の「新規採用医員(研修医)文献検索オリエンテーション」を次のように実施しました。

- ・対 象 新規採用医員(研修医) 63名
(内51名出席)
- ・日 時 6月6日(金) 9:00-11:30
- ・場 所 附属図書館
- ・内 容

2班に分けて文献検索の概要を説明。MEDLINE、医学中央雑誌およびカレントコンテンツ検索、インターネットを介した文献検索の紹介と実習を行いました。

(感想) 思った以上の出席率で混雑しました。窮屈なところで申し訳ありませんでした。

(情報サービス係)

医学総合研究特論(大学院特別講義) 文献検索に関するオリエンテーション 新規採用医員(研修医) 文献検索オリエンテーション アンケート結果

アンケート回収率

〈大学院学生 7名(出席者15名中)=46.6%〉

〈研 修 医 23名(出席者51名中)=45.0%〉

	院 生	研修医
MEDLINE CD-ROMについて		
よく検索する	2	2
時々検索する	3	11
検索したことがない	1	7
無記入	1	3
医学中央雑誌CD-ROMについて		
検索したことがある	4	9
検索したことがない	2	11
無記入	1	3
CCoDについて		
検索したことがある	1	
検索したことがない	5	20
無記入	1	3
インターネットの利用について		
よく利用している	2	4
利用したことがない	5	15
無記入		4
職員の説明について		
わかりやすい	6	15
わかりにくい		3
その他		3
普通		1
無記入	1	1
内容について		
簡単	1	7
難しい	4	8
その他		3
無記入	2	5

その他は……

やらなければわからないと思う

使ってみないとわからない

などでした。

○その他感想

図書館にない雑誌が多すぎる

良かった

またお願いします

などでした。

(情報サービス係)

——平成9年度5年生オリエンテーションのお知らせ——

本年も、5年生を対象とした「医学文献の調べ方に関するガイダンス」を附属図書館にて、9月に実施する予定です。文献検索の概要や、MEDLINEやCD-ROM検索などの紹介と実習を行う予定です。
(情報サービス係)

新 着 ビ デ オ の 紹 介

この度、図書館に新しくビデオテープがはいりました。カウンターにおいてありますので、どうぞご利用ください。

目で見える身体のしくみ (全14巻)

人体の解剖・生理をわかりやすく解説。

目で見える医学の基礎 (全17巻)

器官系別に解剖・生理・病態のベーシックな知識を体系的に解説。

目で見える生化学入門 (全5巻)

生化学の基礎をイラストで解説。

リハビリテーション医学 (全5巻)

脳卒中、嚥下障害、排尿障害、下肢切断と義足、呼吸器のリハビリテーションについて解説。

X線像の読み方：上部消化管篇 (全4巻)

早期の微細病変を見逃さないためのX線写真の撮影手順と検査手技をわかりやすく解説。

X線像の読み方：大腸篇 (全4巻)

微細病変を見逃さない正しい検査法をわかりやすく解説、実技しています。

看護のためのアセスメント (全12巻)

症状別にアセスメントの方法と病態の理解、検査データの読み方、観察のポイントについて事例をあげてわかりやすく解説。

基礎看護技術ビデオシリーズ：注射編 (全3巻)

ケアレスミスから大事故になりがちで、生命にまで影響を及ぼす注射について、準備から方法を実際に行い、わかりやすく解説。

基礎看護技術ビデオシリーズ：感染予防編 (全4巻)

昨今深刻な社会問題にまでなってきた院内感染に対処すべく無菌操作の基本的なケースと、医療器材廃棄物の処理の仕方のポイントを解説。

基礎看護技術ビデオシリーズ：体温・脈拍・呼吸・血圧の測定編 (全4巻)

測定に必要な基本的技術に焦点をしぼり、手技・手順を解説。

ビデオで学ぶ介護技術の基本 (全9巻)

スタンダードな介護技術を中心に解説。

目で見える薬理学入門 (全16巻)

CGイラスト・アニメーションで病態と適用薬剤、その基本的薬理作用をわかりやすく解説。

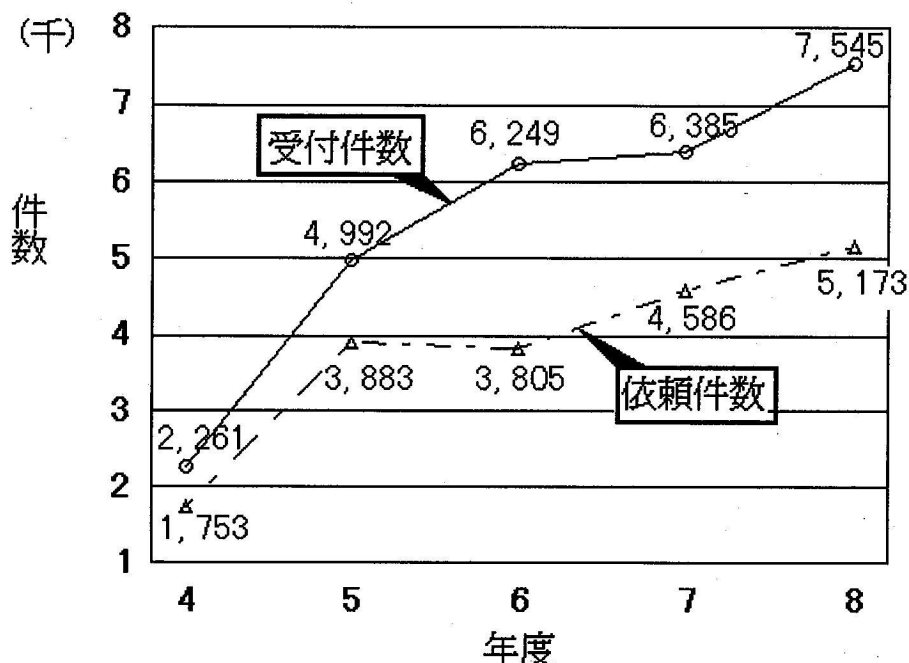
医療従事者のためのAIDSの知識 (全2巻)

最新の情報にもとづくエイズの基礎知識、臨床医学の要点、感染予防、カウンセリングなどの方法を映像化したもの。
(情報管理係)

附属図書館統計

平成8年度	図書	2,685	(冊)	平成8年度相互	受付	7,500(件)	(45)(件)
	製本雑誌	2,115		貸借()現物	依頼	5,100	(8)
受入冊数	合計	4,800		貸借数で内数	合計	12,600	(53)
平成8年度	和雑誌	513	(種)	平成8年度	文献検索利用件数	22,729件	
	洋雑誌	553			図書	59,388	(冊)
受入雑誌数	合計	1,066		所蔵冊数	製本雑誌	59,173	
平成8年度	学生	4,487(人)	7,739(冊)		合計	118,561	
	教職員	5,222	11,396	入館者数	有人開館	77,657	(人)
館外貸出	合計	9,709	19,135	H 8.4- H 9.3	無人開館	23,477	

相互利用統計の推移



相互利用とは、図書館間で行なわれる相互貸借サービス（文献複写や資料現物貸借の依頼および受付など）のことです。自館にない資料を補うために他館に文献の複写を依頼したり、資料現物を貸してもらったりします。本学では特に文献複写の件数が多いようです。

現在、学術情報センターの運用するNACSIS-ILL(平成4年4月運用開始)システムを介してメッセージのやりとりが可能になっており、このシステムの確立により、従来は郵便などで行っていた依頼がオンラインで直ちに先方に届き、依頼が断われても、次の図書館へ自動的に転送されるようになりました。処理の迅速化に伴い件数は年々増加の傾向にあります。

料金は、文献複写の場合は枚数かける単価（国立大学の場合35円、公私立大学は独自に決められています。）と送料、現物貸借の場合は往復にかかる送料が必要になります。

処理が迅速化されたとはいえ、相手館の対応次第ですので到着までにかかる時間は不確定です。到着しますと図書館からお知らせしますのでしばらくお待ち下さい。

(情報サービス係)

◆ 附属図書館の活動 ◆

(平成9年1月～平成9年6月)

附属図書館委員会関係

第80回 2月12日

- ・平成9年度一般設備費要求について
- ・平成10年度歳出概算要求について
- ・大学院生用図書の選定方法について
- ・看護学科関係の図書整備方針について

第81回 5月20日

- ・「附属図書館の将来構想に関する報告書」に基づく今後の対応について
- ・外国雑誌の購入予算の見直しについて

図書館関係会議

図書館情報システム特別委員会

ILLシステム専門委員会

第4回 1月27日 (大阪大)

近畿北部地区国立大学図書館機械化連絡会議

ネットワークシステム委員会

3月18日 (京都大)

平成9年度近畿地区国立大学図書館協議会

4月24日 (京都大)

平成9年度国立大学附属図書館部課長会議

5月27日 (東京医科歯科大)

第66回近畿地区国公立大学図書館協議会総会

6月13日 (大阪女子大)

第22回国立医科大学図書館会議

6月24日 (京都市)

第44回国立大学図書館協議会総会

6月25～26日 (京都市)

日本医学図書館関係

第68回日本医学図書館協会総会

5月22日～23日 (旭川市)

第4回医学図書館員基礎研修会実行委員会

1月17日 (奈良県立医科大)

3月7日 (近畿大)

5月9日 (大阪市)

6月4日 (大阪市)

日本医学図書館協会企画・調査委員会

第5回 2月19日 (関西医科大)

第6回 4月18日 (大阪医科大)

第7回 6月27日 (奈良県立医科大)

研 修 関 係

平成8年度近畿地区国公立大学図書館協議会研究集会

1月24日 (大阪市大)

近畿地区国公立大学図書館協議会第1回主題別研究集会

2月13日 (京都大)

学術情報センター新目録所在情報サービス説明会

2月21日 (京都大)

学術情報センター情報処理セミナー

2月7日 (京都市)

学術情報センター電子図書館サービス説明会

3月4日 (大阪大)

シンポジウム「3Aを目指す電子図書館」

5月15日 (相楽郡)

英国立図書館文献複写センターサービス説明会

6月19日 (大阪市)

本学関係者寄贈図書

岡田慶夫（前学長）

虫を愛で医を語る
近代文芸社 1997

木之下正彦（内科学第一講座・教授）

循環器検査イラストガイド
南江堂 1997

半田 譲二（副学長・病院長）

CT-MRI画像で見る脳血管障害（CD-ROM）
フジサワ 1997

第22回若鮎祭実行委員会「医学関係企画」より

エイズを生きる
解放出版社 1994
そして僕らはエイズになった
晩聲社 1993
いのちの輝き
岩波書店 1993

ご惠贈ありがとうございます。図書館の蔵書として広く利用に供させていただきます。

人事異動（ ）内は旧官職名など

平成9年1月1日

情報サービス係員 中 道 麻 美（新任）

平成9年4月1日

附属図書館長 挾 間 章 忠（新任）

情報サービス係長 辻 井 喜美代（情報サービス係）

情報サービス係員 井 上 敏 宏（京都大学附属図書館情報サービス課）

副学長(医療担当) 半 田 譲 二（附属図書館長）

京都教育大学附属
図書館情報管理係長 八 木 あすか（情報サービス係長）

平成9年6月1日

附属図書館長 前 田 敏 博（新任）

副 学 長
(教育、研究及び厚生補導担当) 挾 間 章 忠（附属図書館長）

退 職 中 道 麻 美（情報サービス係）

滋賀医科大学附属図書館報「さざなみ」No.41

1997年8月発行

編集・発行 滋賀医科大学附属図書館 〒520-21 大津市瀬田月輪町

TEL.0775-48-2077 FAX.0775-43-9236